

宮城県児童自立支援施設における支援の現状と課題

－事例から見る施設内支援－

さわらび学園 技術主査 吉野 舞

Key words: 育ちの場、日常生活の維持、支援の質

I はじめに

平成10年に教護院から児童自立支援施設へ名称が変更され、15年が経過した。

(1) 非行進度よりも家庭環境の問題の影響を色濃く受けた子ども (2) 未診断でありつつも発達障害の特徴を持つ子どもの育ちの場として、子どもや職員の要因・勤務体制上の制約から目前の問題の対応に追われながらも、子どもたちの日常生活を形作り維持し、支援の質を保つために多くの時間と努力が費やされている。

今回は支援が比較的順調な事例を挙げ、問題行動の構造を捉え対応のポイントを振り返り、今後の学園の機能強化に向けて必要な方策について検討したい。

II 活動内容

さわらび学園には、暴力・家出・万引き等の問題により児童相談所から措置された子どもたちが入所している。問題行動の背景には、養育者からの虐待・離婚・死別等の家族の問題や、子どもの育てにくさ等の子育ての問題が影響している。

施設入所はもつれた家族関係を作り直すチャンスでありつつも、子どもは見捨てられ不安や自己変容への不安が強まり、親は子どもの成長への期待と不安が入り混じり、リスクをはらんだライフイベントであるといえる。

学園生活では、時間軸に沿った生活を送り、あたりまえに暮らし、大人からふつうの対応をされる経験を通して社会性や対人関係、自己評価の伸長を目指している。

事例では、入所理由(窃盗・虚言・暴力)と関連した日常生活上の問題に対して、交替制勤務の制約を利用して問題行動の中のひとつに改善が見いだされた一例を挙げる。

III 考察

子どもの人生に関わる支援の一端として、施設内支援には尽力し時間をかけなければならない事柄がさまざまある。日々目前の問題の対応に追われつつも子どもの問題行動を見立てて対応策を考えるために、専門的な知識の習得、経験の蓄積、自己研鑽の機会が必要とされる。

IV 結論

職員の専門性を向上させ、マンパワーの充実を図り、安全に働くことのできる職場環境を保障することを通して支援の質を高めることが望まれる。

VI 引用・参考文献

- 1) 平成25年度全国児童自立支援施設新任職員研修資料